

令和4年度 臨床研究テーマ成果報告書

診療科（部）名：口腔外科1

第4期中期目標・中期計画期間中の臨床研究テーマについて該当するものにチェックを入れてください。（塗りつぶし可）

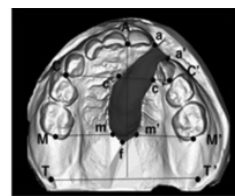
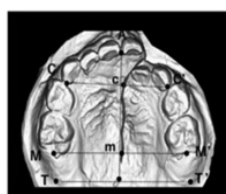
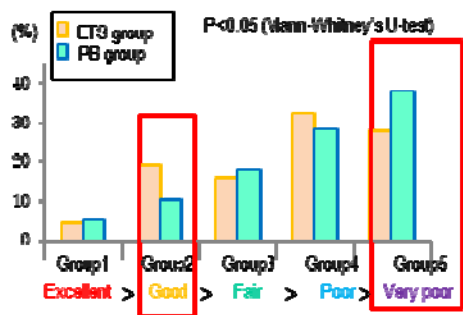
- 1. 「歯科再生・再建医療拠点形成による先進的歯科医療の推進」に関する臨床研究
- 2. 「オーラルビッグデータ管理体制の整備」に関する臨床研究
- 3. 「『口の難病』バイオリソースの整備と活用支援の推進」に関する臨床研究
- 4. 「歯科医学臨床教育の質保証」に関する臨床研究
- 5. その他

研究期間：2022年11月10日～2027年3月31日

研究課題名：口唇裂・口蓋裂の一貫治療における口腔顎顔面成長変化に関する研究

研究課題の概要及び成果：口唇裂・口蓋裂治療において良好な鼻咽腔機能と顎発育を獲得するために、より低侵襲な手術方法の開発ならびに被裂形態に合わせた術式の選択、改良を検討することを目的とする。口蓋裂一次手術前後に採取した歯列模型と X 線画像写真を用いて、早期 II 期的口蓋裂一次手術法 (ETS) あるいは前庭粘膜弁による硬口蓋閉鎖 (VF) の有用性について検討を行った結果、1. Goslon Yardstick を用いた上下顎歯列弓関係は ETS 群が従来の I 期的手術法よりも良好なスコアを示した (Otsuki K. et al., Cleft Palate Craniofac J. 2022)。また、2. VF を用いた術式は硬口蓋部骨膜に及ぼす剥離侵襲を低減させることにより、犬歯間、臼歯間幅径は従来の術式と比較して優位性を示すことが明らかとなった (Fujimoto Y. et al., Cleft Palate Craniofac J. 2022)。以上の研究成果は、ETS, VF 法が口唇裂口蓋裂一次治療成績向上に大きく寄与するものであり、顎発育の成長時期を考慮した手術実施時期や手術創の癒痕拘縮を軽減させる術式の改良が長期予後を考える上で重要であることが示唆された (田中晋. 大阪大学歯学誌 第 66 巻 第 2 号, 2022)。

上記概要・成果に関連する図表等



左図：Goslon Yardstick を用いた ETS 法、PB 法（従来法）における上下顎歯列弓関係の比較

上図：PB/LF（従来法）(左)、VF 法(右)による硬口蓋閉鎖後の歯槽形態を示す

当該臨床研究が「口の難病プロジェクト」に関連しているか否か下記の BOX のいずれかにチェックを付してください。（塗りつぶし可）

- 関連がある
- 関連はない